

平成 30 年度  
第 29 回 大好き いばらき 作文コンクール

# 受賞作品集

テーマ

「わたしの大好きないばらき」



チャレンジいばらき県民運動／公益財団法人 日立財団

## 第29回 大好き いばらき 作文コンクール

### 【ねらい】

平成31年に本県において開催される「いきいき茨城ゆめ国体2019」に向け、チャレンジいばらき県民運動では、未来を担う子どもたちに、茨城の豊かさや暮らしやすさ、伝統文化のすばらしさに加え、茨城の魅力を再認識してもらうため、「わたしの大好きないばらき」をテーマに作文を募集し、個性と創造性に富む心豊かな人づくりを目的に実施。

【主催】 チャレンジいばらき県民運動 【共催】 公益財団法人 日立財団

【後援】 茨城県 茨城県教育委員会 公益社団法人茨城県青少年育成協会  
株式会社茨城新聞社 株式会社茨城放送 NHK水戸放送局  
毎日新聞水戸支局 読売新聞水戸支局 朝日新聞水戸総局  
産経新聞社水戸支局 日本経済新聞社水戸支局 東京新聞水戸支局  
茨城県学校長会 茨城県PTA連絡協議会

【テーマ】 「わたしの大好きないばらき」

【対象】 茨城県内に通学する小学校・中学校及び義務教育学校・特別支援学校の児童、生徒

【募集期間】 平成30年7月2日（月）～9月7日（金）

### 【応募数】

実施部門	応募数
小学校低学年の部	3,264
小学校高学年の部	5,689
中学校の部	7,508
合計	16,461

### 【表彰】

茨城県知事賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・賞状及び副賞 3名  
日立財団 小平記念賞・・・・・・・・・・・・・・・・賞状及び副賞 3名  
茨城県教育委員会教育長賞・・・・・・・・・・賞状及び副賞 3名  
茨城新聞社長賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・賞状及び副賞 3名  
チャレンジいばらき県民運動 理事長賞・・・・賞状及び副賞 3名  
日立財団 奨励賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・賞状及び副賞 30名

### 【審査・選考】

※大好きいばらき作文コンクール審査会（平成30年9月13日及び10月31日開催）において選考委員：17名（専門家及び県民活動推進員 毎年度委嘱）

委員長：川嶋 秀之（茨城大学教育学部教授）

副委員長：床波 忠明（公益財団法人 日立財団 常務理事）

委員：照井 康郎（茨城県教育庁総務企画部生涯学習課長）

板橋 幸子（茨城県教育庁学校教育部特別支援教育課長）

岩田 利美（茨城県教育庁学校教育部義務教育課長）

大高 茂樹（株式会社茨城新聞社 編集局報道部担当部長）

潮田 昌造（公益社団法人茨城県青少年育成協会 副会長）

小林由士郎（チャレンジいばらき県民運動 専務理事）

県民活動推進員：森 賢禧，井坂 英二，寺内 義與，加藤 欣一，福間 智子，池田 智子，大久保 昌義，川野 和彦，島田 百子

## あつあつなばばもん

ひたちなか市立津田小学校 三年 大森 滯

わたしのすむひたちなか市の元なかみなど市は、わたしの  
お母さんが育った場所です。

先日、お母さんに、

「お母さんがむかしよく通ったお店につれて行ってあげる。」  
と言われ、なかみなどのあるお店へ行きました。そのお店は  
馬場先、みんなからは、ばばもとよばれているもんじやや  
きや、やきそばが食べられるお店でした。ばばもんは、おば  
ちゃん一人でお店をきりもりしていて、近所の人が次から  
次へと来てにぎわっていました。

わたしたちは、もんじややきとなかみなどやきそばをたの  
みました。もんじややきは、自分たちの前の鉄ばんでじゅー  
じゅーやいて、あつあつあつでおいしかったです。なかみな  
とやきそばは、めんがふとめでもつちもちでぺろりと食べて  
しまいました。

食べ終わって帰りぎわに、おかあさんとおばちゃんが立ち  
話をはじめました。おばちゃんはもうばばもんをはじめて  
四十年だそうで、年はなんと八十さいになるのだそうです。  
「むかしよく来ていた子たちが大人になって子どもをつれて  
また来てくれたりするんだものね。なかみなどもずいぶん

子どもはへったしさびしくなっちゃってね。でもこうして  
次の世代につづくんだもの。町を盛り上げよう、ふっ活さ  
せよう。なかみなどやきそばだってもっと広められるはず。  
だからね、おばちゃんは、まだまだ店をつづけるよ、でき  
るかぎりね。あなたたちもゆめにむかってがんばるのよ。」  
ばばもんのあつあつの食べものど、おばちゃんのあつあつ  
なパワー全開な気持ちを聞いて、わたしもこれからどんなこ  
ともあきらめずにがんばっていかうと思いました。

おばちゃんの気持ちにまけないよ。おばちゃんもずっと元  
気でばばもんつづけてね。また来るからね。

## ご先祖様とつながる「ぼんづな」

石岡市立高浜小学校 五年 廣原 瑛太

ぼくのおばあちゃんの地いきには、「ぼんづな」という行  
事があります。

ぼんづなとは、毎年八月十三日のおぼんにわらで編んだ  
りゅうにご先祖様を乗せて、各家々に送りとどける行事です。  
ぼんづなは、ぼくのおじいちゃんの小さいころから続いてい  
る伝統ある行事です。

ぼんづなは当日、子どもたちが墓地に集まり、みんなで協  
力して作ります。ぼくたちだけでは力不足なので、地いきの  
おじさんたちも手伝ってくれます。おじさんたちも、子ども  
のころぼんづなを引いていたし、こうして指どうもしてくれ  
るし、とても深いつながりです。一人一人わらを手でねじり、

それを合わせて大きな束にし、りゅうの形にしています。頭は大きく、しつぽにつれて細く編んでいきます。畑でれたナスを目に見立てたり、ぼくたちが持つひもをりゅうの足にしてみたりと、いろいろと工夫をして作ります。ご先祖様の乗り物がりゅうだなんて、それで家に帰るなんて、とてもかつこ良過ぎます。

ぼんづなができ上がると、いよいよ出発です。

「仏さまあま、乗りらっしょよ。」

と、大きな声を出しながら墓地を何度か回り、ご先祖様をぼんづなに乗せます。すると、おじいちゃんやおばあちゃんが本当に乗ったような重みを感じます。それに、不思議と温かなやさしい気持ちになります。

「仏さまあま、乗せてきた。」

と、みんなで声をそろえながら、一けんずつぼんづなを引いて歩きます。

「ご先祖様の家にとり着すると

「仏さまあま、おりらっしょよ。」

と、家の中にぼんづなを置き、ご先祖様をおろします。どの家も、ご先祖様が帰ってくるのを待っていたのか、たくさんの花をかざっていたり、ごちそうがならべてあったりしています。また、歩き通しのぼくたちにも、冷たい飲み物やおかしを用意してくれます。なかなか会えないおばさんに「大きくなったね」とか、小さいころ遊んでくれたお兄さんにも「元気か？」なんて声をかけてもらったりして、何だか照れくさい感じです。

この行事、前は男の子だけで行っていました。今は子ども

もの数も減ってきて、女の子も参加するようになりました。そうしないと、この行事ができなくなってしまうからです。それに、ぼんづな作りを指どうしてくれるおじさんたちもだんだん少なくなっています。とても悲しく、さみしい気持ちです。

でも、ご先祖様がいたからこそ、家族があつてぼくがいること、友達や地いきの人たちに支えられて生かされている、ということ。ぼんづなを通して気づくことができました。だからこそ、ご先祖様から受けついで命のつながりに感謝し、ぼんづな行事を大切に守っていかなければならないと思います。

## 地域の自然とともに

常陸大宮市立山方中学校 一年 菊池 恋々菜

私のふるさととは、ここ、茨城県です。私の家は、その茨城県の常陸大宮市、家和楽というところにあります。

四月、入学式の次の日、私は、自分の家から学校までの道のり約六キロを、友達と一緒に自転車をこいでいました。その時私はふと、トンネルの前にある広い田んぼに目が留まりました。まだ何もされていない、乾いた田んぼでした。でも何日かすると、その田んぼには水が張られました。田んぼに水が入るとともに、私の学校生活にも新しいことが入ってきました。部活の体験入部、中学校の新しい授業、制服での生活、自転車通学などです。

登校中、私が自転車のスピードを緩めながら、奥の方を見ていると、トラクターで代かきをしている農家の人を見つめました。私の通っている中学校は、山方小学校と、山方南小学校、この二つの小学校から集まって、一つの学年が出来ています。代かきで土がかき混ぜられるように、新しい友達との交流が始まりました。私に通っていた山方小学校とは違う、色々な性格や特技を持った友達がいきました。席がえや、グループ学習を通して、少しずつ新しい友達と話すようになり、仲良くなれました。私は、代かきをしている様子をもう少し見ていたかったです。学校に遅れてしまうので、再びスピードを出し、先を走る友達の後を追いつ、学校へ向かいました。

五月、小さな稲の苗が植えられていました。

ちよつとの雨や風で倒れそうに見えて、私は少し心配になりました。でも、その苗はとても強く、ピンと田んぼに立っていました。得意気に太陽を見ていました。この頃、私は剣道部に正式に入部しました。剣道部部長の、三年生の先輩が剣道をしている姿は、このピンと立った苗のように、とてもかっこよかったです。

苗はどんどんどんどん生長し、いつの間にか、田んぼが一面すき間なく、緑色になっていました。とてもきれいな緑色でした。学校生活にも慣れ、朝と帰りの準備、授業の間の移動、給食の準備と後片づけなどが、慌てずに落ち着いて出来るようになりました。

七月、大きくなった稲に小さな稲穂が付いていました。とても小さくて、まだ稲穂が付いていない稲もありました。農家の人はうれしそうに、その稲の手入れをしていました。ま

るで、自分の子供みたいに、稲をかわいがっているように私には見えませんでした。私は、六月の地区大会を勝ち抜き、中央大会に出場しました。個人戦は体調が悪く出られませんでした。二日目の団体戦は出ることが出来ました。他の中学校には強い人がたくさんいて、身長差によつての技の出し方を学びました。

そして八月、部活に行く途中に田んぼを見ると、稲穂がほぼ全ての稲に付いていました。色は緑色でしたが、前より大きくなっていておどろきました。秋が近づくと、稲が違う姿になっていくと思います。私は、その日が来るのが楽しみです。稲にはこれからも、雨や雷、台風に負けずに、がんばって生長してほしいです。私の中学校での目標は、勉強と部活の両立です。どちらにもかたむかず、両方で良い結果を出したいと思っています。

私の通る道には、他にもたくさん田んぼがあります。でも、どの田んぼも全てが同じではない気がします。それは、田んぼによつて代かきや田植えなどをする時期が違ったからです。そして、農家の人によつて稲の育て方も違うと思います。でも私は、この思いだけはどの人も一緒だと思います。「みんなにおいしいお米を食べてほしい。」「おいしいお米に育ってほしい。」と。私はこの茨城が、私のふるさとの地域が大好きです。そして、私もこの茨城で触れ、感じた自然を大切にしたいです。大人になっていきたいと思っています。

## わたしのうまれそだった「そめや」

石岡市立石岡小学校 一年 中 島 琉 夏

わたしがうまれそだった「そめや」は、いしおかしなにからすこしはなれていきます。

まわりは、たんぼ、はたけがおおいです。いまは、たんぼのいねがいろいろにそまって、とてもきれいです。とおくには、つくばさんがみえながめはさいこうです。

わたしがすんでいるそめやには、「ふどきのおか」というしせつがあります。

むかしのひとのすんでいたいえや、れきしをべんきょうすることができるとてものです。

四がつには、たくさんのしゆるいのさくらがさいて、みにくるひとで、おおにぎわいです。

また、四がつ十九にちは、りゅうじんさんのおまつりがあります。むかし、りゅうじんさんのりゅうが、やまからおりてきて、あめをふらせて、たうえのみずにこまらないようにしてくれただけです。それでおまつりをして、りゅうじんさんのりゅうにおれいをしています。

このとき、「十二ざかぐら」というおかぐらをおどります。このおかぐらは、なんびやくねんもまえから、ずっとそめやのちいきで、うけつがれてきました。

まいとしじゅんばんで、おまつりのとうばんをまわしています。

ちいきのひとたちが、たやさないで、まもりつづけています。ちいきのひとたちのところが、ひとつになっているからだとおもいます。

これからも、わたしたちがおとなになっても、むかしのれきしをなしてあげたりして、つぎのひとたちにひきつがれていくように、していきたいとおもいます。

そして、ちいきのひとたちが、いままでまもってきたように、つぎのひとたちにつなげていきたいとおもいます。

## きらきらひかるいし

桜川市立雨引小学校 一年 笠 倉 萌々花

わたしはゴールデンウィークに、いとこといっしょに、いちめんいしへあるいていきました。いちめんいしは、かばさんにあります。いえからあるいて、一じかんくらいです。

もりのなかにはいると、きゅうにすずしくなりました。わたしは、すべって、ころんでしまいました。けどなみだがでないようにがまんして、なかないで、ゴールをめざしました。あるきにくいばしょは、てをつかひながらのほりました。「やったあ、ついたあ。」

いちめんいしにとうちやくです。でこぼこしたいしが、どうろみたいひろがつていました。そこは、とうめいなみずがながれていました。さわってみると、とてもつめたいみず

でした。みずにたいようのひかりがあたって、いしがきらきらひかっています。とてもきれいでまぶしかったです。

おとうさんたちは、たくさんしゃしんをとっています。かながわけんからきた、いとこのおとうさんは、

「これぞまさしく、いばらきけんのだいしぜん。」

といいながら、しゃしんをとっていました。

かえりは、かわがながれるのをみながら、あるきました。わたしは、このかわは、うちのちかくのかわと、つながっているのかもしれないとおもいました。

おかあさんとおねえちゃんは、ならいごとでいけなかったので、しゃしんをみせてあげました。ふたりとも、

「わあきれい。」

と、なんともいいました。

やまをのぼるのはたいへんだったけど、とてもきれいなけしきだったので、いまでもおぼえています。こんどは、おかあさんとおねえちゃんもいっしょにのほりたいです。

## ぼくがすきなばしょ

水戸市立五軒小学校 一年 杉山 優樹

ぼくがすんでいるいばらきけんには、たくさんのあそびばしょがあります。

まず、ぼくのいえのすぐそばには、せんばごがあります。せんばごには、たくさんのこいやはくちよう、かもなどがいます。おとうさんがせんばごをはしるとき、ぼくはじてんしゃ

でついでいきます。はるは、さくらがきれいです。なつはみどりのはっぱがきらきらして、あきになると、あかやきいろにそまったはっぱがとてもきれいです。ぼくは、なつのみどりのはっぱがすきです。

つぎに、よくいくのがげいじゅつかんです。なつのあつひには、水あそびをすることができます。なつやすみに、ともだちと水でつぼうをつかってあそべてたのしかったです。タワーにのぼって、うえからすんでいるまちをみるのもたのしいです。

おおあらい水ぞくかんは、ぼくのすきなさめがたくさんみれます。おしよくじタイムやなるほどウォッチングもおもしろいです。ぼくは、さかなのかたちをしたおおきなゆうぐであそぶのがだいすきでした。しょうがくせいになって、あそべなくなってしまうのがざんねんです。タッチングプールでは、うみのいきものにさわることができます。ぼくは、ヒトデやウニなどのいきものにさわったことがあります。さわられていちばんうれしかったのは、トラザメです。ザラザラしていて、おとなしいです。またかぞくでいったときに、さわりたいです。

こんなにたのしくて、なんともいきたいとおもうばしょが、いばらきけんにはたくさんあります。みりよくどランキングで一ばんしたのいばらきけんだけ、きつとあそびにきたら、いいところだなあとかんじて、すきになるとおもいます。ぼくは、いばらきけんがだいすきです。

# いばらきけんのたからもの

日立市立大沼小学校 二年 小 泉 こころ

わたしがすんでいるいばらきけんは、しぜんやおいしいたべものがたくさんあります。

わたしは、うみのちかくにすんでいるのであるいて行くこともできます。うみを家ぞくでさんぽしたり、水あそびや魚つりに行きます。夏のかい水よく場には、色いろなところからたくさんの方があそびに来ています。ちかくにうみがない人たちは、ながいじかんをかけて車やでん車などであそびに来るそうです。うみの大すきなわたしにとって、今のかんきょうはとてもありがたいです。

おいしいたべものもたくさんあります。お父さんのおじいちゃんとおばあちゃんから、うみでとれたてのウニやアワビをもらってたべることがあります。とれたてのウニはそのままでたべてもあまくてとてもおいしかったです。アワビは天ぷらやバターしょうゆでたべるのが大すきです。お母さんのおじいちゃんとおばあちゃんからはよくメロンをもらいます。いばらきけんはメロンがゆう名とテレビで見たことがあります。とてもあまいメロンはわたしと妹の大こうぶつです。

このようにわたしのすんでいるいばらきけんにはしぜんやおいしいたべものがたくさんあります。うみであそべるのも、おいしいたべものがたくさんたべられるのも、いばらきけんにすんでいるからです。でも、わたしのしらないいばらきけんはまだまだたくさんあると思います。もつともつといばら

きけんのことをしりたいです。おじいちゃんとおばあちゃんもいばらきけんに住んでいるので、おとまりやあそびに行ったりすることもできます。いばらきけんはとてもいいところですよ。いばらきけんへ出あつたものすべてがわたしのたからものですよ。大すきな家ぞくや友だちがたくさんいる「いばらきけん」に大人になつてもすみたいです。「いばらきけん」は、わたしにとって一ばん大せつなところですよ。

# いばらきからうちゅうへゴー

北茨城市立精華小学校 二年 小 國 太一朗

ぼくのしょうらいのゆめは、うちゅうひこうしです。うちゅうへ行つてくだものをそだててみたいからです。くうきのないうちゅうで、どうやってくだものがそだつかしりたいし、どんなあじになるかきょうみがあります。

いばらきにはジャクサやエキスポセンターがあります。ぼくはそこでうちゅうはおもしろいとりました。うちゅうへ行きたいとおもいました。いばらきはうちゅうにとでもちかいとかんじます。

ジャクサのロケットをけんきゅうしているのはつくばけんきゅう学えんですが、とばしているのはたねがしまうちゅうセンターです。アメリカにはロケットをとばすきちが二つもあるのです、日本にも二つつくつてほしいです。その新しいセンターをいばらきにつくりたいです。

日本のうちゅうセンターは、ものしかうちゅう上げていないの



で、人をのせたロケットもうち上げてほしいです。たねがしまでくだものをうち上げて、いばらきからぼくがとんで、うちゅうステーションでみかんをそだてます。もちかえったみかんは、いばらきのめいさんになってにんきがでると思います。

いばらきけんをうちゅうのけんにして、ぜんこくの人がみに来たら、にぎやかになってぼくもううれしいです。せかいからもにんきのぼしよとしてテレビきよくがたくさんきたら、外国でもとてもゆうめいになります。

もし、うちゅうセンターを作って、こわれてしまったらざんねんです。何回も作ってこわれないようにしたいです。一回だめでも、あきらめないでがんばればかならずせいこうすると思う。ぼくもいろいろなことをあきらめないでがんばっていこうと思う。うちゅうのことにきょうみをもちつづけて、いばらきからうちゅうにとんでいこうと思う。

## いばらきのなっとう日本一

つくばみらい市立陽光台小学校 二年 名 嘉 宙太郎

ぼくは、なっとうが大すきです。とくに、ねばねばが気に入ります。このねばねばには、えいようがたくさんあります。

ぼくは、まい日、なっとうをたべます。りょ行に行っても、かならずたべます。なっとうまき、なっとうごはん、なっとうじる、なっとうで作るものは、ぜんぶおいしいです。

なっとうは、えいようがあつておいしい、むてきのたべものです。

なっとうを日本で一ばん多く作っているとどうふけんは、いばらきけんと聞いたことがあります。

なっとうの作り方はこうです。まず、大ずをあらいい、水にひたします。つぎに、大ずをむします。そして、なっとうきをうえて、はっこうさせます。それをひやしてから、入れものにつめて、ほうそうしたら、おみせにならぶそうです。

はっこうは、くさることほとんどおなじです。

むかしの人が、うまのえさでながくおいておいた大ずが、たまたまねばしているのをはっ見してたべてみたらおいしくて、そこから、なっとうがたん生したそうです。

くさっているかもしれないうまのえさを、さいしよにたべたこの人は、すぐゆう気があつたと思いました。そのおかげで、今、なっとうをたべられていると思います。

ぼくは、いばらきけんのなっとうが一ばんおいしいと思います。りゆうは、じぶんたちが一ばんなんだという気もちをこめて、なっとうを作っているからだと思います。

ぼくは、これからもなっとうをたくさんたべること、なっとうを作ってくれている人たちをおうえんします。そして、これからもずつと、いばらきけんが、なっとう日本一でいてほしいです。

# ぼくの大すきないばらき

鹿嶋市立平井小学校 三年 山本 敦 雅

ぼくがすんでいる茨城県鹿嶋市は、サッカーJリーグ鹿嶋アントラーズのホームタウンです。ぼくは、サッカーが大好きです。いつもお兄ちゃんといれん習しています。

夏休みに、カシマサッカースタジアムに家族や友だちと鹿嶋アントラーズのゲームを二回、かんせんに行きました。サポーターの人たちといっしょにおうえんするのは、とても盛り上がって楽しかったです。ぼくたちのおうえんがとどいたのか、二ゲームとも鹿嶋アントラーズがかちました。ぼくは、とてもうれしかったです。

カシマサッカースタジアムでは、ゲームの日には、地元のお店がたくさん出店します。ゲームをかんせんしながら、鹿嶋のおいしいものを食べるのも楽しいです。たくさんのおきやくさんが来ていましたが、もつともつといろんな人が来てくれたらいいなと思います。

来年は、「いきいき茨城ゆめ国体二〇一九」がかいさいされます。鹿嶋市はサッカーの会場です。国体のために、市内のいくつかのサッカーグラウンドがきれいにせいびされています。ぼくも、そのグラウンドでプレーしてみたいです。

今年、ぼくはお姉ちゃんとお兄ちゃんと「いきいき茨城ゆめ国体鹿嶋市花いっぱい運動ボランティア」に登ろくしました。サルビア、マリーゴールド、ペチュニアの三つのプランターにそれぞれおうえんメッセージを書いて、大切に育てて

います。十センチもない、とても小さいなえだつたけど、今ではたくさんのお花がさいています。十月には、リハーサル大会がかいさいされます。ボランティアのみなさんやぼくたちが心をこめて育てた花で会場をかざって、せん手のみなさんやおうえんに来てくれる人たちをおもてなしたいです。たくさんのおうえんが鹿嶋に来て、サッカーや鹿嶋のまちを楽しんでくれたらうれしいです。

## 茨城県の真心

下妻市立騰波ノ江小学校 三年 粟野 玲衣

私は、この茨城県でどんな産業が有名なのか調べてみました。メロン、レンコン、クリ、ビール、しばなど、さまざまな産業があります。

メロンは、ほこた市で、年間三万二千トンも収かくされています。

私は、メロンが好きです。メロンがなぜ、こんなに、甘く美味しいのだろうと考えました。本にもものっていないので、自分でこう考えました。メロンを、つくっている人たちが真心をこめて、つくったからこんなに、甘く、美味しいのだろうと、メロンを食べているときに思います。ほかのもの全て、真心をこめてつくられているのだろうと思います。私たちは、真心をこめて、つくられたものを、食べ、真心をもらっているのです。私も、その真心を、こめてつくった食べものが、一番美味しいと思います。

私たちも、いずれ真心をこめて、ごはんや野菜いやくだものなどを作ると思います。そしてまた、たくさんの人に、真心をもらおう、とどける、もらおう、とどけるをくりかえして、真心は、たくさんの人にとどけられます。きらいな食べ物も、自分で、真心をこめてつくってみれば、その食べ物も、きらいから好きになるでしょう。にがてな食べ物も、いずれ、その良さが分かることになるでしょう。私も、きらいなものがあります。でも、自分でつくって食べたなら、きらいから好き、になりました。やっぱり真心をこめてつくったものは、美味しくて好きになります。

茨城では、たくさん農作物がつくられています。その真心は、農作物にのって全国へ届けられています。私の住む茨城がそんなところなんてとてもすてきだと思います。

## 海へ行く道

つくば市立大曾根小学校 三年 酒井 颯 大

ぼくは、サーフィンが大スキで、毎週のように海へ行きます。ぼくが住むつくば市から、海へ向かう道には、いばらきのいい所がたくさんあります。

まず出発すると、りょうがわに田んぼが広がって、その向こうにつく波山が見えます。近くには、ほうきよう山が見えて、春には山ざくらがとてもきれいです。

少し行くと、今度はかじゅ園がたくさんあります。春にはイチゴ、秋にはブドウ、なし、かき、くりなどがとれます。

自分でとることもできるし、直売所で買うこともできます。ぼくは、イチゴとブドウが大スキなので、買ってもらえると、とてもうれしいです。

次は、かすみが見えてきます。つりを楽しんでいる人をよく見ます。それと、そのあたりには、レンコン畑がたくさんあります。夏には、ピンクや白のハスの花がさいて、とてもきれいです。

海が近づいてくると、メロンのビニールハウスや、さつまいも畑が多くなります。ぼくは、メロンのソフトクリームを食べることが、一番の楽しみです。

いよいよ海です。ちゅう車場には、いばらき県外から来た車がたくさんとまっています。ぐん馬県やとち木県からサーフィンをやりに来る人が、たくさんいます。ぼくは、「いばらきの海、いいでしょ！」と、自まんしたくなります。

波がよくない時には、水族館やアウトレットに行つて遊ぶこともできます。魚市場で魚を買ったり、はまやきを食することもできます。

家からたった一時間の間に、こんなにたくさん、いばらきのいい所があります。ぼくは、こんないばらきが大スキです。

# のこしていききたい茨城県の自然

石岡市立赤瀬小学校 三年 清水朝子

私は、石岡市八郷地区に住んでいます。大自然に囲まれた中で楽しくすごしています。

八郷地区はいいところがたくさんあります。その中でも私が好きなのは、山に囲まれていて、田んぼが広がっていて、川がながれている自然がゆたかなところです。山は秋が一番きれいです。山が赤や黄色、オレンジ色にそまっています。とてもきれいです。田んぼも秋が一番きれいです。米ができてきて、一面黄金色できれいだからです。

自然は虫にとっても大切だと思います。なぜなら、ちようは、花のみつを食べています。かぶと虫も木のじゆえきを食べます。虫は自然の中の植物をたべて生きているからです。よく鳴いている虫はせみです。夜はクツワムシがガシャガシャと鳴いています。うるさいけれど八郷らしい出来事です。

また、八郷の空気も好きです。このことをよく感じるのは、千葉県の住宅街にあるおばあちゃんの家から帰ってきたときやさんぽをしているときです。八郷の空気をすうとおいしくて心がおちつきます。

野さいや果物がおいしいことも八郷の好きところです。私は、このゆたかな自然を生かして作った食べ物が大好きです。野さいは何でもとれます。果物はみかん、りんご、ぶどう、かきなどのかじゆ園があります。私は、とくにいちごが

好きです。あまずっぱくておいしいので好きです。また「やさ」と納豆」という納豆を作っている工場があります。その納豆は地元の大豆を使っています。お米を作っている田んぼもたくさんあります。作っているお米のしゅるいは「コシヒカリ」です。学校のきゅう食でも八郷のお米が出ます。いつもおいしいお米を食べられてうれいしいです。

私が、八郷地区で好きところは、全部自然が役に立っていると思います。この自然はこのさきもずっとのこしていききたいです。

## 大すきな筑波山

つくば市立秀峰筑波義務教育学校 四年 倉持彩花

毎朝目がさめると、わたしの部屋のまどからはいつもりっぱな筑波山が目にとびこんできます。一年を通して、そのすがたは毎日毎日がうように思います。朝焼けの空のあおの筑波山、夕焼けにそまったむらさきの筑波山、くもりの日には一つの山になってしまうこともあります。

わたしは筑波山がすきで、パパといっしょによく山にのぼりに行きます。部屋のみどから見える筑波山とはちがい、桜川の上を通るころには、筑波山がわたしをおいかぶさるように、大きなすがたでせまってきます。筑波山神社の大きな鳥いを横に、つつじがおかにかうと、いよいよ山のぼりがはじまります。さい初の階だんはそれほどでもないのですが、べんけい七もどりをすぎたあたりから、岩の間りよう

手を使いがんばって登らなければなりません。さい後の力をふりしぼって着く女体山の山ちようは、さつきまでの岩にかこまれた道とはまるでちがう、広々とした大空がわたしの目にとびこみます。その下に広がる、かすみがうらが光りかがやく姿は、何回見てもあきることはありません。

そしてなだらかな坂道をくだり、み幸が原でかき氷を食べ、男体山にむかいます。急な坂道と階段はつづき、山ちようにとう着します。女体山よりせまく感じますが、そこからのけ色の先には、わたしの家がある安食地区を小さく見ることができます。

パパはかならず女体山と男体山をのぼるので、何でなんだろうと思って聞いてみました。

「筑波山の男の神様と女の神様の山で、みんながなかよくすごせるように、二人の神様においのりするためにのぼるんだよ。」

と、教えてくれました。今までのぼっていたのは、けんこうのためだと思っていました。そんな意味があるとは知りませんでした。

さい近は、筑波山もとてもこんでいて、たくさんの人を見かけます。山のぼりの時に会おうと、

「こんにちは、がんばって。」  
と、必ずあいさつをしてくれます。パパが言ったように、みんながなかよくできているのかな、と少しうれしくなりました。

わたしの大好きなつくば市に、こんなすばらしい山があることを、ほこりに思います。わたしがママになった時にも、

子供といっしょにのぼれるように、ずっとすてきな筑波山でいてほしいです。

## 泉が森

日立市立水木小学校 四年 石井 結菜

わたしの町には、泉が森という所があります。泉神社とわき出る泉があり、とてもきれいな場所です。わたしが幼稚園に通っていたころ、帰りにお母さんと泉が森による時がありました。遊ぶ所ではないけれど、わたしは何となく泉が森に行くのがすきでした。小学生になった今も、泉が森はわたしのすきな場所です。

泉が森には、こんこんとわき出る泉があります。池のそのこのすなをふき上げながらわき出る泉は、とても不思議です。水がすき通っていてきれいなので、ぽこぽこことわき出ている様子がよく見えます。泉が森は、奈良時代の常陸風土記というのに書かれていたので、ずっと前からわき出ている事が分かります。昔からあの場所で、ぽこぽこことわき出ている、たくさんの人達の役に立ってきたんだなと思いました。わたしは、ぽこぽこことわき出ている様子は、生き物が動いているみたいで、見ていてあきません。青白く見える感じや、まわりを木でかこまれている感じは、まるで物語の世界に入りこんだみたいで、不思議な気持ちになります。

泉神社は、日立市の中でもとても古い神社です。鳥居をくぐると、両わきに木がならんでいて、木のトンネルみたい

なっています。この道は、木の間から風がふいてきたり、太陽の光が差しこんできたりして、気持ちがいいです。その先に、推定樹齢四百五十年のご神木があります。このご神木は、昭和の初めに雷に打たれておれてしまったそうです。杉の木に桜が根づいている、めずらしいご神木でもあるそうです。上の方はおれてしまっているけど、長い間ずっとそこにあるのはすごい事だと思います。近くで見ると、とても太く、はく力があります。あの場所で、神社を見守って、がんばっている木なのだと思います。

わたしは、泉が森に行くときと空気がすんでいる感じがして、スツーとした気持ちになり、心が落ち着きます。わたしの住んでいる町に、こんなステキな場所があるという事は、うれしいです。これからも、大切にせずと残していきたいです。

## 守りたいふるさとのでんとう

行方市立玉造小学校 四年 塚 本 彩 衣

わたしの住む地いきには、昔からおぼんに行われる行事があります。ぼんづなとよばれるものです。ぼんづなとは、竹にわらなわをまきつけたもので、それを地いきの小学生が持ち、はか場でご先ご様を乗せてから集落の家をねり歩いて、ご先ご様をおろすという行事です。昔は男の子だけが参加していたそうですが、今は子どもが少なかったため女の子も参加しています。

この地いきでは、約七十けんの家を五時間かけて一けん一けん歩いて回ります。

初めて参加したのは、一年生のときです。暑いし長時間歩くのはつかれるなと思いました。この行事にどんな意味があるのかわかりませんでした。けれど、一けん一けん回っているうちに、この行事の大切さに気がつきました。

ご先ご様をおろすときのかけ声は、「ほーとけさま、おりらっしょ。」です。わたしは少しはさかしく、最初は小さな声で言っていました。もう四年生なので、今はてい学年の子に負けないぐらい大きな声で、ご先ご様にお家に着いたことをつたえます。すると、家の人たちはとてもよろこび、「来てくれてありがとう。」や「暑いのに大へんだね、がんばってね。」と感しゃの言葉を言ってくれます。つめたいジュースやおかしを用意してくれる人もいます。持ち帰る分のお茶がしを包んでくれる人もいます。どの家の人もおぼんづなが来るのを待っています。

おじいちゃんやおばあちゃんたちは、「ずいぶん子どもがへったね。」と言っています。もし、しよう来この行事がなくなってしまうたら、ご先ご様たちが自分の家に帰ることができなくなると思います。そして、毎年ぼんづなを楽しみに待っている人たちががっかりすると思います。ぼんづなで家を回ると、たくさんの人と知り合いになれます。近くに住んでいるのに、初めて顔を見る人もいます。わたしのこともたくさんの人に知ってもらえます。こうして人と人とがつながっているのだと思います。

わたしは、このでんとうを大切に守り、地いきみんなまで未

来へつなげていきたいです。わたしが大人になったときも、子どもたちが元気にぼんづなをひいているとうれしいです。

## 大好き真かべのお祭り

つくば市立竹園東小学校 四年 平山 あかり

「せーの、ガガガガガガー。ピーカランカランカラン。」  
「わっしょい、わっしょい。」

わたしのおじいちゃんとおばあちゃんの住む真かべ町では、夏休みの初めにぎおん祭りが行われています。わたしが住んでいる町は、真かべ町ではないけれど、生まれた時から毎年このお祭りの時は、真かべに行っています。だから、お祭りの音を聞くと、夏が始まったと感じます。

このお祭りは、四つの町からかざりつけされた、出車が出て、小さな町を練り歩きます。出車の上では、おはやしや、ひよつとこが、おどったりしてにぎやかです。昼間の出車は子供の時間で、つなをもつてみんなでひっぱりまわります。暑くて重くて大変だけど、ひっぱった後のおにぎりと、アイスのごほうびがうれしいです。夜の出車は、大人の時間で、出車をおして動かします。おはやしやかけ声をもらって、わくわくします。だけど出車をおすスピードが速くてちよつとこわいです。

わたしは、真かべ町に住んでいないけれどこの時だけの友だちがいます。その友だちはおたがいな名前を知りません。話をしたこともありません。だけど出車の上でいっしょに、お

はやしをやっているうちに目が合えば笑いあったり、かけ声をかけたりできて、うれしくなります。お母さんも言っていました。

「一年に一回だけど、お祭りに来ると、なつかしい友だちに会える。」

と、はしゃいでいました。

また、今年おじさんが、病気になってしまいました。ずっと入院していたので、今年のお祭りは、さんかはできないと言われていました。だけど、お祭り前に良くなってたい院できました。さん加はできなかったけど、お祭りを見て、おはやしを聞いたり、出車の動く音を聞いたりしているうちに、表じょうが明るくなって、声にはりが出てきて、どんどん元気になっていくのが分かりました。

お祭りは、お友だちを作らせてくれたり、人を元気にさせてくれたり、みんなを笑顔にする、すごい力をもっているなあと思えました。だから、みんなを元気にしてくれるこのお祭りが、ずっと続いてほしいと思います。

「せーの、ガガガガガガー。ピーカランカランカラン。」  
「わっしょい、わっしょい。」

祭りが終わっても、わたしの頭の中では、ずっとお祭りの音が流れています。来年まで、待ち遠しいです。

# 「いばらき」をめし上げれ!

筑西市立下館小学校 五年 柳 田 結 衣

「んっ?おいしいっ!」

今まで、食たくに出されても、決してはしをつけなかった「チンジャオロース」だったけれど、いいにおいととなりでモリモリと話もしないで、む中で食べているお父さんのいきおいにつられて、わたしもきらいなピーマンとお肉をおそろのおそろの口に入れてみた。少し青くさいにおいとほんのちよつとの苦みが口と鼻のおくに残ったけれど、思った以上においしくて、今まで食わずぎらいをしていたことを後かいた。お父さんと取り合うようにしてピーマンを食べているわたしを見て「茨城で取れたピーマン、おいしいでしょ?ピーマンだけじゃなく、茨城はおいしい野菜や果物をいっぱい作っているんだから、もっと野菜を食べてほしいな。」とお母さんが言った。

そういえば、四年生の社会で勉強したことを思い出した。お正月のおせち料理に入っている「れんこん」や、冬のなべ料理にかかせない「はくさい」や「みずな」、ケーキや和がしに使われる「くり」、そしてわたしが好きな「メロン」も、しゅうかく量日本一だと聞いて、びっくりしたんだっけ。その他にもこまつなやねぎ、トマトなど家や学校の給食で食べられている多くの農作物を作っていて、その産出額は全国二位だということも。

特に、わたしが住む「筑西市」は、農業がさかんで、学校

の給食のごはんは、筑西市産のお米が使われている。おかずにも「地産地消」で、茨城県産や筑西市産の野菜などが多く使われているそうだ。なかでも「し(下館市)あ(明野町)わ(協和町)せ(関城町)カレー」という、筑西市に合っている前の四つの市町の農作物を使ったカレーは、みんな大好きで、食べると名前のとおり幸せな気持ちになり、午後の授業もがんばろうという、エネルギーにもなる。

わたしたちは、食べ物からエネルギーをもらって生きていく。特に、おいしいものには、人を幸せな気持ちにしたり、笑顔にしたりするすごいパワーがあると思う。山や海などの自然にめぐまれた茨城県には、米や野菜、果物などの農作物だけでなく、太平洋近海でとれる新鮮な魚や、ブランド肉のひたち牛やローズポークだってある。茨城県産の材料だけでも、おいしいものがたくさん作れそう。わたしは、お母さんやおばあちゃんのお手伝いをしながら、料理を教えてもらうことが、今とても楽しいので、いつか茨城県産の材料を使って、オリジナルの料理を作れるようにしたい。そして、もしその材料がきらいでも、おいしく料理して好きになってもらえるような工夫をして、その材料も茨城県のこと、好きになってもらえたらうれしい。

来年開さいされる「いきいき茨城ゆめ国体」で全国からやって来る人たち。茨城県のゆたかな自然と茨城県のほころびのいいものを、

「どうぞおなかいっぱいめし上げれ!」



# 受け継がれる農業と茨城

筑西市立古里小学校 五年 小島佳樹

七月のある日、トマトのビニールハウスの近くを散歩していると、

「これもダメだな。」

と、父がトマトを見ながらつぶやいていました。

「何がダメなの。」

ぼくはハウスの中に入って聞きました。七月のビニールハウスの中は、朝の八時頃でも入った瞬間「モワッ」とした熱気を感じるほどむし暑いです。

ぼくの家は農家です。小玉スイカやトマト、米などを出荷しています。家にあつた資料を見てみるとトマトの生産量は、全国五位で四・七万トンです。(二十十七年調べ) こんなにたくさんのトマトを作るとは簡単ではありません。

五分も中にいると玉のような汗がだらだらと流れでてくるビニールハウスで父は毎日トマトの世話をしています。父の手の中にある青色のトマトは、先の方に穴が開いていました。先に穴が開いてしまったトマトは、このまま育てても規格外になってしまふことがあるそうです。だから、小さいうちにとってしまい、他のトマトが大きく育つようにするのだそうです。せっかく育ててきたトマトを、とってしまうのはなんだかもったいないような気がしました。でもこうして一つ一つ大切に、ていねいに育てたトマトだからこそ、食べる人みんなに喜ばれる、甘くておいしいトマトになるのだと思います。

した。横芽をとつたり、水やりをしたり、野菜を育てる仕事は毎日休みなく続きます。もうすぐ出荷できるトマトが、台風で一夜にして落ちてしまうことだってあります。そんな時父はとてものがっかりしているように見えます。だから、きれいに箱に並んだトマトをみる目は、とてもうれしそうでやさしいです。きつと食べてくれる人の笑顔が浮かんできているのだと思います。

茨城県には、農産物を育てている農家さんがたくさんいます。おいしい農産物を育てようと毎日頑張っているからこそ、レンコンやメロンなどで、全国上位の農産物がたくさんあるのだと思います。そして、それは今だけではなく、祖父や曾祖父の時代から変わらず続いてきたものだと思います。代々受け継がれる土地とその土地で作られる農産物、これがそが茨城県の最大の魅力でありほこりだと思えます。

しょうらいの夢は今まで農業ではありませんでした。今年の夏休みに、トマトハウスを見たり、父の話を聞くことで農家の仕事は、今までずっと受け継がれてきたことを知りました。少しだけ、農業を受け継いでいきたいと考えるようになりました。

ぼくは生まれ育った茨城県が、今も、そしてこれからも大好きです。これからもっとみんなに茨城県のすばらしいところを知ってもらえたらいいなと思っています。

# ロボットの町つくばでの出会い

つくば市立吉沼小学校 五年 梶本千聡

ぼくの住むまち、つくば市は、ロボット工学の研究がさかんなまちです。駅前の道路には、ロボットが実験で通行するための標識をいくつも目にします。また、地域のイベントや研究所の公開、ショッピングモールなど、様々な場所で、福祉用ロボットなど実際にふれることができます。そのような中で、ぼくは幼いころからロボットを身近に感じ自然に興味をもつようになりました。

また、ぼくは小さいころからレゴブロックで遊ぶことが大好きでした。レゴブロックで自分の考えたまちを作り、消しゴム人形を住人にしていつも遊んでいました。まちには家やお店、公園などがあり、自由に作りかえていつまでも遊びました。自動販売機やエレベーターなどの仕組みを考えて作るのが楽しくて仕方ありませんでした。そんな遊びにいつも付き合ってくれたのは、ぼくの祖母です。祖母は消しゴム住人の一人になりきって、いつもぼくの想像の世界で遊んでくれました。

そんな祖母がある日、ぼくにぴったりの習い事を見つけてきてくれました。それは、レゴブロックでロボットをつくって、プログラムで動かすという教室でした。ぼくは、すぐにその教室にむ中になりました。教室の先生は、外国の先生で、英語で会話をしなければなりません。ぼくは、ロボットをつくるために、一生けん命英語で話しました。その教室でぼく

は、仁先生と出会いました。仁先生は、ぼくたちのプログラミングやロボット作りの課題を考えてくれる先生です。ぼくが、ある時先生に、パソコンのことで質問をしました。それは、先生の出す課題とは関係のない質問でした。でも先生は、「出された課題だけでなく、自分から興味をもったことを質問してくれるのは、とてもうれしい。」と言って、とても丁寧に質問に答えてくれました。それからぼくは、パソコンにもっと興味をもつようになり、先生にいろいろなことを質問しています。先生は難しいことも、ぼくにもわかるように教えてくれます。サーバーのことやホームページのこと。ぼくが、何がどう分らないかを説明すると、とても丁寧に一個一個大事なことをメモしながら教えてくれます。今ではぼくは、本屋さんでパソコンの本を買って、調べながら、自分でプログラミングの勉強をしています。そして、わからないところは仁先生に聞くようにしています。

ぼくは、仁先生との出会いにとっても感謝しています。そんな大切な出会いをくれた、ロボットの町、つくばがぼくは大好きです。そして、ぼくの興味にいつまでもつきあってくれた祖母にも感謝しています。祖母は、ぼくの好きなことを大切にしてくれ、世界を広げてくれました。これからも、ぼくは、自分の周りの人や、出会いに感謝して、自分の好きなことを大切にしていきたいと思っています。

# 我が家のしよぼろ納豆

日立市立大久保小学校 六年 勝 田 晴 香

その日、私は父と行った近くのスーパーでぐう然ある商品に目がとまりました。パッケージには納豆と書いてありましたが、いつもの見慣れたパックのものとはちがっていました。とう명한容器の中には丸い豆と、同じ色だが四角い何かが混ざっているのが見えました。気になった私は容器をうら返して原材料を確認しました。それは大根でした。

家に帰って、その話をする、母はふくろから取り出した切り干し大根を水でもどし、酒としょう油を加えてフライパンで熱しました。そして、それを納豆に加えてみなさいと言いました。初めて食べたしよぼろ納豆は、大根に染みたましよ油の味が納豆によくからんでおいしく、ポリポリとした歯ごたえは今までに感じたことのない新せんな食感でした。

私は元々納豆が好きでしたが、この食感にすっかりやみつきになり、夏休みのほとんど毎日、しよぼろ納豆を作って食べました。しだいに混ぜ方も自分で工夫して、まず納豆を少しネバネバが出るくらい混ぜたところで切り干し大根を加え、さらに少し混ぜたところで納豆のタレを少し加え、その後はネバネバがたくさん出るまで混ぜるとおいしくなることに気づきました。さらに、いろいろなものを加えてみました。オクラと一緒に混ぜて最後に刻みのりをかけると、みずみずしい食感といその香りも合わさって、私の一番のお気に入り味の味になりました。

毎日しよぼろ納豆を食べながら、納豆にはまだまだいろいろな食べ方があるのだな、と気づかされた一方で、納豆は、血液をサラサラにしたり、腸の働きを良くしたりといったナットウキナーゼと呼ばれる酵素のおかげで、とても体に良い食品であることはよく知られているものの、その食べ方は意外と知る機会が少ないのかもしれないとも感じました。

やはり色が地味だからでしょうか。家にあつた表紙のきれいな料理の本には、最初に「料理は五感で楽しむもの」と書いてありました。「青黄赤白黒」という文字と共に、キュウリとナスと人参のつけ物がのったかわいい小皿に、カボチャとナスのみそ汁、それにご飯という、よく見ると主菜が無いのに、お腹いっぱいになりそうないろどりの写真に見とれながら複雑な気持ちになりました。

最近スーパーに行くと、いつもしよぼろ納豆をチェックします。棚では、梅干し、たくあん、キュウリやナスの浅漬け、キムチ、多くのカラフルな食品に囲まれていて、やっぱり色は地味だよな、と思います。ただ同時に、この独特の味と食感は絶対に他の食品では楽しむことのできないものだよな、とも思います。だから、オクラとのりを加えた我が家のしよぼろ納豆は、これからずっと我が家の食たくをささやかにいろどっていくと思います。

# いとこが教えてくれたこと

筑西市立村田小学校 六年 大 関 由 那

私は自分が住んでいる茨城県に誇りが持てなかった。全国の魅力度ランキングでは、いつも最下位だし、周囲は見渡せど、空と田んぼと畑ばかり。夜になると灯りが少なく真っ暗闇だし、買い物に行こうと思っても、近くに流行のお店はなし…もつと都会に住みたかったって、ずっとずっと思ってた。

夏休みになって、鎌倉に住む三歳年上のいとこが一週間、私の家に泊まりに来た。いとこが来てくれるのは大歓迎だが、何をして喜ばせたら良いか、とても悩んだ。

いとこは虫を捕えたり、祖母と野菜を採ったり、庭に作った小さなプールに飛び込んだり、手持ち花火を両手に持って、円を描き、

「見て、見て！キレイー！」

と、私からしてみれば全然普通の事で大はしゃぎして喜んでた。私はゲームセンターや外食したりできると期待していたから、正直、少しガッカリだった。もしかしたら、他所の家だから我慢しているのかもしれない。だとしたら可哀想だから、親に言ってどこかに連れて行ってもらわないと…と思

い  
「楽しい？」

と、いとこに聞いてみた。ところが、

「むっっちゃ楽しいじゃん！自然が豊かで、採れたての野菜が

食べられるって幸せだよ。それに近所の人とか、みんな気さくに話しかけてくれるから、自分の家みたいだよ。」

満面の笑みでそう答えるから、私は

「よかったね。」

としか返事ができなかった。

その日の夜、いとこに茨城のいいところを聞いてみた。いとこは色々調べていたみたいで、茨城は大きい物が好きらしいと言って、牛久の大仏、水戸の巨大はにわ、巨大いだらほっち、つくばのロケット、石岡の巨大獅子頭と、中には私も知らない物まであって驚いた。最後にいとこは、

「だけどさあ、一番ビックリしたのはさあ、スイカを半分に切ったのをスプーンでほじって食べるなんて、うちじゃあり得ないよ。超面白い！茨城は大きい物大好きだね。」

と、爆笑するから、私にとっては全然当たり前的事だったけど、面白くなってきて、二人で一緒に笑った。

ああ、そうか。毎日生活していると、当たり前になっちゃって、いとこの感じるような新鮮な気持ちで、見る事ができなくなってしまうんだ。私がいとこの住んでいる所のいい所をいっぱい言えるように、いとこは茨城のいい所がいっぱい見えてるんだ。当たり前すぎて忘れてた。自然の中で遊べる事、新鮮な食べ物がある事、恵まれた事だったんだ。

「また来年も来るから！」

そう言って、いとこは帰っていった。茨城に住む私に私には見えていなかった茨城の魅力を教えてくれて、ありがとう。あれから一年。そしてまた、暑い熱い夏がやってきた。

# 私のおじいちゃん、おばあちゃん

潮来市立津知小学校 六年 高尾 侑 希

私のおじいちゃんとおばあちゃんは、射撃場を経営しています。日本では、公安委員会の試験を受けて許可された人だけが、鉄砲を所持することができます。射撃場は、その試験を受けて許可を得た人たちだけが、鉄砲を打つ場所です。また、三年に一度更新があり、審査を受けます。茨城県に射撃場は五ヶ所しかありません。その一ヶ所が、私のおじいちゃん、おばあちゃん二人で経営している潮来射撃場です。

クレー射撃は二〇一九年に行われる「国体」や、二〇二〇年に行われる「東京オリンピック」の正式種目となっています。二〇一九年の国体、クレー射撃の会場は笠間市だそうです。また、バルセロナオリンピックで銀メダルを取った選手が潮来射撃場にも練習に来てくれたこともあります。おじいちゃんとおばあちゃんが潮来射撃場を始めたのは、今から四十六年前のことです。私のお母さんはまだ、産まれていませんでした。私はこのことを聞いた時に、とてもおどろきました。私は小さいころから、広い射撃場で遊んできました。四月には「桜」や「八重桜」が満開となり、七月には射撃場中に「山百合」が咲きほこり、他の場所では見られないと、みなさん楽しみにしてくださっています。

時期それぞれに大変なことがあり、特に私が心配な季節は夏から秋です。一年の中で一番台風がくることが多いからです。台風が来た時は家に帰らず二人とも泊まりこみで地下に

ある機械が水につからないように、水中ポンプの様子や時には発動機をかけたりと、被害が出ぬよう夜で見回りをします。他にも広い敷地の中を、お客様に気持ち良く使ってもらいたいため、大汗をかきながら毎日草刈りをしています。冬は、夜遅くまで何日もかけて、一年間のスケジュールを決めます。また、一年を通して、重い物を運ぶ仕事があり、いつも腰や膝が痛いと言っているのを聞いた時に私はとても心配になります。それでも、どこか痛いところがあってもがまんして、仕事をこなしている姿は、私の自慢です。

おばあちゃんは、「この仕事をやっていて一番良かったことは、東京都や群馬県などの茨城県だけでなく、日本全国各地からお客様が来てくださること。大勢のお客様とのご縁がありさまざまなことを教えていただけただけに本当に感謝している」と言っていました。どんな時でもお客様のことを第一に考え仕事をしているおじいちゃん、おばあちゃんのことを私は大好きです。これからも体に気を付けて、長生きしてほしいです。

## 大好きな私のふるさと

下妻市立千代川中学校 一年 小林 奈央

私の住んでいる地区には「宗任神社」という神社があります。

宗任神社は今年で創建約九百年の歴史ある神社です。宗任神社は年間で行われる行事がたくさんあります。毎年一月

十一日に行われる「おめぎめ祭」は、日本一早い豆まきとして有名です。また、小・中学生の夏祭りは、本宗道地区をぐるっと一周します。私は夏祭りなどの年間行事をいつも楽しみに毎日生活しています。

そんな私が宗任神社の行事で一番心待ちにしているのは、八月十六日に行われる「輪くぐり祭」です。古くから宗道の輪くぐりとして知られ、チガヤでつくった輪をくぐり、罪・汚れや疫気をはらいます。さらに、交通安全や家内安全、商売繁盛などの祈願も輪をくぐるによりできます。そして、子供の守り神として「虫ふうじ」も行っています。「虫ふうじ」とは、子供に虫気が起こらないように、まじなうことです。私も小さい頃に虫ふうじをやってもらいました。

私は小さい頃から毎年かかさずに輪くぐり祭に行っていました。輪くぐりの後は、決まってお守りを買ってもらった記憶があります。お守りを売っている巫女さんを見て、「私も巫女さんやりたいなあ。」と小さい頃からあこがれていました。

あこがれは現実になりました。小学四年生の時に、「巫女さんやってみる?」

とお願いされたのです。巫女さんという役目で神社のお手伝いができ、その日の輪くぐりはいつもと違う、なんだか不思議でワクワクする空気に包まれていたことを私はまだ、はっきりと覚えています。最初は巫女さんってどんなことをやるのかなと、とても不安な気持ちでいっぱいでした。けれども、一緒に巫女さんをやっている先輩や地域の方々に仕事の内容を教えていただき、少しミスはしてしまっただけ、無事に

巫女さんのお仕事ができました。お仕事が終わった後の達成感を初めて味わったあの日のことは絶対に忘れないと思います。

私は四年生のある時、

「巫女さんやってみる?」

と言ってもらったあの瞬間、私に巫女さんが務まるのかなと思ひ、やってみようか断わろうか、とても迷いました。でも、あの時断わらないという選択をして、本当によかったと思っています。巫女さんなんてなかなか体験できることではないし、自分のためになる貴重でいい体験だと思います。私は小学四年生からの四年間、まだ巫女さんのお仕事をやらせてもらっています。今でもまだ、ミスはしてしまうし、分からないこともいっぱいあって、周りの人に迷惑をかけてしまったって申し訳ないと思っています。でも、私は巫女さんのお仕事を続けられるところまで、続けていけたらいいなと思っています。今の私にできることは、迷惑をかけてしまった方々へ感謝の心を伝えるために、輪くぐり祭などの地域の行事に取り組むことだと思います。

私は私のふるさとが大好きです。私の町は笑顔と優しさで満ちあふれています。これからも、地域の行事に積極的に参加して、笑顔がいっぱいの大好きな町を守っていききたいと思っています。

# 私の家は自然薯農家

北茨城市立中郷中学校 一年 蛭田真穂

私の祖父は、北茨城の特産品の自然薯を作っています。自然薯は、山に自然に生えているヤマイモの一種です。それを畑でたくさん作れるようにするために、北茨城の山懸さんが栽培法を開発したそうです。

今年七十五歳になる祖父は、定年退職後、栽培法を習って、元気な時は千本作っていたそうです。一昨年に腰の手術をしたので今年は、五百本ぐらいに減らしているそうです。

自然薯は、五月頃に種イモを植えて十二月に収穫します。その中でも種イモを植える作業は、とても手間がかかるのでゴールデンウィークには、祖父母、父母、私と妹の家族みんなで山の上の自然薯畑に行きます。

小学校の頃はピクニック気分で行っていましたが、最近は手伝いをたくさんしています。帽子をかぶり、手ぬぐいを首に巻き、長ぐつをはいて、父の運転する軽トラックで畑に向かいます。山の上の畑は、ウグイスやキジが鳴いていて、別世界のようなのです。以前、東京に住んでいる一歳年上のいとこが遊びに来た時、畑の周りの山の中を探検したことがあります。行ってみると、今までに通ったことの無い道やイノシシの足跡、木もれ日が竹やぶの中にもふりそそいでいて、まるで「かくや姫」の物語に入ったかのような気分になりました。そんな自然豊かな畑に在るととても楽しいです。

私が自然薯畑で手伝う仕事は、肥料が入っていない山土を

自然薯が育つ「パイプ」に入れることです。土を多く入れすぎないようにすることと石などのゴミが入らないように気をつけて土を入れていきます。

その「パイプ」を祖父が受け取り、約三十センチメートル間かくで土の中に丁寧に着けていきます。

母は、私が土を入れた「パイプ」を祖父の所へ運んだり、「パイプ」を入れた後の土を小学生の妹といっしょにふみかためたりしています。

そして父は、「パイプ」をうめる穴を重いくわを持って、ひたすらほり進めます。

祖母は、となりの畑を作っている友達とおしゃべりをしながら畑の草とりをして畑をきれいにしています。

みんながつかれてくると、軽トラックにシートをしていて、おやつタイムになります。青空の下で食べるおやつはおいしいです。

お正月にかざった鏡もちをくぐり、干して、油で揚げた「かきもち」を祖母がおやつに持ってきてくれると、たくさん食べてしまいます。

私は春の植えつけの時期しか手伝っていませんが、その後も冬の収穫までたくさんのお仕事を祖父母や父は、がんばっています。そうやってできた自然薯を出荷し、全国の人たちに味わってもらえることを自まんに思います。

今の北茨城の自然薯組合は七十五歳の祖父でも、若い方になるそうです。

これからの北茨城の自然薯を特産品として作っていくには、私たちのような若い人が、進んで手伝いをしたり、PR

活動に参加したりして、北茨城の自然豊かな環境で育った自然薯をもっと有名にするのが私たちの役目だと思っています。

また、私のもっと、大変そうな祖父の手伝いをして力になってあげたいと思っています。

## 茨城県のピーマン

水戸市立内原中学校 一年 篠崎 帆花

「さくらんぼといえば山形県」「みかんといえば和歌山県」なのに、どうして「ピーマンといえば茨城県」にならないのでしょうか。茨城県はピーマンの生産量日本一です。しかも、さくらんぼやみかんよりも、ピーマンの方が、店頭や食卓でも多く見かける食材だというのに。

確かに、ピーマンは、こどもの嫌いな野菜で一位（「めばえ」二〇一六年八月号アンケート）に選ばれています。しかしこれは、いかにピーマンがメジャーな野菜なのかを示していることの裏返しでもあります。

ピーマンは、ビタミンA、C、Eが豊富な野菜で、ビタミンCはレモンの二倍、トマトの五倍もあると言われています。これらの成分は、皮ふや粘膜を強くしたり、コラーゲンの合成を助けたり、血行を良くしたりするはたらきがあります。その他にも、ピーマンに多く含まれている苦味成分クエルシトリンは、高血圧抑制や抗うつ作用の効果があります。

特徴は、豊富な栄養だけではありません。食材としてのピーマンは、定番の肉詰めから中国料理のチンジャオロースー、

ピザのトッピングなど、和・洋・中、煮る、焼く、炒めるなどの全てのことができるすばらしい野菜なのです。

私はそんなピーマンが大好きで、もっとピーマンを好きになって欲しいし、そのピーマンの生産量日本一の茨城も、もっと有名になって欲しいと思っています。そこで、そのためには何が必要かを考えました。

なぜ、「ピーマンといえば茨城県」にならないのか、父に聞いてみました。そうしたら父は、「アピールが少ないからじゃない？」と言いました。私は、なるほどなと思いました。アピールを工夫すれば、それを見たより多くの人達が知ってくれて、どんどん広がっていく。そうすることで、茨城県はピーマンの街として有名になると思うのです。

そこで、やや供給過多になりつつあるゆるキャラではありますが、それでも根強い人気のあるゆるキャラに、ピーマンのキャラクターがないか調べてみました。

まず見つけたのが、神栖市観光協会のマスコットキャラクター「うぐびー」です。「うぐびー」は市の鳥であるウグイスがモデルで特産のピーマンの帽子をかぶっています。しかし、これではウグイスに目が行ってしまいピーマンはもはや脇役です。これではピーマンの宣伝にはあまりつながらないと思いました。

次に見つけたのがJAしおさいのキャラクター「ドラP」です。頭部がピーマンの形をしているドラゴンのキャラクターです。しかし、一目見ただけでは、頭部がピーマンだとは気づきにくく、子供たちも、ドラゴンのキャラクターとしてだけ認識してしまいそうです。



どのキャラクターもとてもかわいいのですが、ピーマンが主役として扱われていないことと、自治体ごとに個別にPRしていることで、全国一位の茨城のピーマンがかすんでしまっています。

まずは茨城県として、統一したピーマンのキャラクターがあると思います。もちろん、ピーマンが主役で、他のものと混ぜないキャラクターにすることも大切だと思います。「ふなっしー」は梨、「ねばーるくん」は納豆、「くまモン」は熊でしかないように長く人気を保つキャラクターの多くは、いろいろ混ぜていないものが多いような気がします。そして、私の大好きな茨城のピーマンが、もっと有名になると良いと思います。

## 未来の私に向けて

筑西市立下館中学校 二年 廣瀬 十和子

私は旅行が好きだ。家族で、ツアーに参加することも多い。有名な観光地は、もちろん興味深いが、移動する時の景色も見逃せない。ごく普通の住宅地でも、私の住む茨城とは雰囲気が違うし、空の様子も違って見える。日本は小さな国だと言われるが、私にはそうは思えない。大きな川の流れる街、山々に囲まれた街、雪の多い街……とても変化に富んでいる。しかし、旅行からの帰り道、バスが茨城に入ると、やっぱり良い所だなあと感じてほっとする。見慣れた田んぼと筑波山。私が、『大好き茨城!!』と思う瞬間だ。

私の両親も茨城生まれ、祖父母も四人とも茨城生まれだ。私は、生粋の茨城県民と言えるかもしれない。祖父母の家にいくと、ここが茨城であることを強く感じることが出来る。それは、茨城弁が飛び交う会話のせいだ。テレビなどでも取り上げられることが多く、田舎の代名詞のような茨城弁。けれども、きつい意味の言葉でさえ何となくユーモアで包んでしまう、とても素敵な方言だと思う。私は小さい頃、言うことをきかなかった時など、よく祖父から、

「この、ごじゃっぺ!!」

と怒られた。祖父の顔は真剣なのに、その語感と言い方のおもしろさに、私は大爆笑してしまうことが何度もあった。今では懐かしい思い出だ。

私とは逆に、母は学生時代、茨城出身であることが嫌だったそう。茨城弁も含めて、劣等感のようなものがあつたのだと言う。それが、大きく変わったきっかけについて、私に教えてくれた。きっかけは、大学に入るために家を離れたことだった。母は、仙台で寮生活を始めたのだが、耳慣れない東北弁と、気候もずいぶん違う生活に、すっかりまいってしまった。離れてみて、茨城の良さを痛感したのだそう。母は、感慨深げに言った。

「茨城は、本当に良い所よ。でも、外に出たからこそ、そう思えるんだよね。」

思いのつまった言い方だった。それを聞いてとても共感できる気持ちと、それを否定したいような、よく分からない気持ちが一緒になつている自分に気付いた。

「私は、茨城が大好きだし、下館も大好きだよ。だからずっ

「ここに居るつもり。」

ケンカをしたわけでもないのに、なぜか強い口調で言っ  
てしまった自分が、不思議だった。

何日か過ぎて、あの時の自分の気持ち理解しきれず  
いた私は、日曜日の昼食の時に、父にも聞いてみた。

「お父さんも、家を離れて、茨城の良さが分かったの？」

父は、埼玉と東京で暮らした経験がある。

「うーん。元々、好きだったけれど、もっと好きになっ  
たかな。自分の視野を広げると、新しい気付きがあるよね。十  
和子も、地域にこだわらないで、進路を考えた方が良く  
思うよ。」

私は、はっとした。私は中学二年生、来年は受験だ。高校生  
になったら、もうずいぶん大人に近づいてしまう。急に迫っ  
てきた進路の問題に、大きな不安があった。だからこそ、良  
く知っている場所で、ずっと安心して生活したいという気持  
ちになっていたのではないか。母に強く言ってしまったのも、  
実は自分の不安の表れだったのかもしれない。父との会話の  
中で、もやもやとした気持ちを、何となくつかまえられたよ  
うな気がした。

私は今、美術部で一枚の絵を描いている。市内を流れる勤  
行川を、鮭が塑上する場面だ。大好きな風景であると同時に、  
鮭と未来の自分が重なるような気がして、この場面を選んだ。  
私は、茨城の良さをもっと知るために、見聞を広げたいと思  
う。今より、ずっと大きくなって故郷に戻ってこられたら……  
その時、私の目には、どんな茨城が見えるのだろうか。不安を  
希望に変えて、進んで行きたいと思う。

## 茨城県の特色

茨城県立並木中等教育学校 二年 豊崎 祇任

「おめ、ひだりっこぎだな」

この言葉を聞いて、何人の人が意味を理解できるのだろう  
か。「君は左利きだね。」という意味の茨城弁である。千葉県  
出身の母の顔には、「？」のマークがたくさん浮かんでいた。  
このように、茨城県には、標準語とはちよつと違った方言が  
ある。

茨城弁にまつわる話で有名なのは、茨城県のことを「いば  
らぎけん」と発音する人がいるというものである。「いばらぎ」  
と発音しているのを見た茨城県民は、「ぎ」ではなく「き」だ、  
と教える。しかし、当の茨城県民が、茨城弁で訛って「いば  
らぎ」と言っていることも多く、それを聞いて「いばらぎけ  
ん」と思いこむ人もいるようだ。

僕は放送部に所属している。部活では、NHKが主催のア  
ナウンスや朗読の大会に出場している。大会では、正しく原  
稿を読むだけでなく、発音やイントネーションの正確さも求  
められる。そのため、茨城弁の発音は標準語に直さなくては  
ならず、苦労している。

茨城弁は近年話し手が減っていて、特に県南地域では急速  
に減少しているという。僕の通うつくばの学校でも、訛って  
いる人はほとんどいない。親御さんもみんな標準語だ。小学  
校のころは、仲良しの子のお母さんがとても訛っていた覚え  
がある。今考えると懐かしく思う。

少し古いデータだが、一九九七年に、NHKの調査で「訛りがあるのは恥ずかしいことですか」と都道府県ごとに質問したことがある。それによると、茨城県民への調査結果は「とても恥ずかしい」と思っている人が大半だったようだ。僕も母に「都会に出たとき恥ずかしいから、訛りは直しなさい」とよく言われる。

茨城弁について調べていると、「茨城の人は訛っていてださい」という意見を時々耳にする。このことが影響しているからか、茨城県は魅力度ランキング五年連続最下位である。毎年最下位脱却を目指し努力しているが、結果は変わらない状態だ。

一方、二〇一八年の「住みよさランキング」では、守谷市が四位、つくば市が七位となった。魅力度では他の都道府県に及ばなかったのに、なぜ住みよさランキングでは上位に入っているのだろうか。

「魅力度ランキング」は、他の県の人々から見た観光やイメージの面での魅力を測ったものだ。だから、県民にしか分からない地域の事情や風習などは、あまり評価に入っていない。しかし、「住みよさランキング」は、その地域で実際に暮らす人々のデータを参考にしているため、このランキングが高いということは、住む人にとっては茨城はよいところだということになる。逆に言えば、住んでみないと本当の魅力は分からないということだ。

あるウェブサイトに、「茨城は観光に来るところではなく、住むところ」と載っていた。僕もその通りだと思う。大きな観光スポットが少ない代わりに、平坦な土地を活かした農業

を進めている。スーパーに行けば、地元のおいしい作物を簡単に買ってくるができる。これは東京では難しいだろう。海もあり、山もあり、昔懐かしい田舎の風景が今でも残る茨城県、魅力度ランキングは最下位でも、住んでみたらいいところも見つかるはずだ。

早口言葉の一つに、「生麦生米生卵」がある。茨城県は陸稲と鶏卵の生産量が全国一位だ。「生米」と「生卵」を日本一多く生産している県。この早口言葉にぴったりだと思う。ちよっぴり訛っていても、おいしいものが沢山ある茨城県が大好きだ。

## 茨城県の魅力

龍ヶ崎市立城ノ内中学校 二年 岩 瀬 史 絵

茨城県の魅力。みなさんはその言葉からどんなことを連想しますか？他県の人は「茨城県には何があるのだろう」と思うかもしれません。確かに茨城県は最近、全国の魅力度ランキングでも最下位になってしまい、魅力のない県と思われがちです。

茨城県が魅力のない県と思われてしまうのはなぜなのでしょう。それは茨城県の宣伝にあると思います。そこで私は、自分が茨城県の宣伝大使になったつもりで茨城県の魅力を伝えたいと思います。

茨城県には県民が誇れる魅力があります。その一つは、農業がとても盛んであるということです。れんこんやピーマン

などの野菜、メロンや梨などの果物、そして米など、たくさん  
の農作物の収穫量が全国トップクラスです。また、調べて  
みると農業産出額は北海道に次いで二番目ということも分か  
りました。

魅力はまだあります。小さい子が遊ぶことのできる施設や、  
景色のきれいなスポットなども人気です。

私の住む龍ヶ崎市には、たつこの公園という場所がありま  
す。天気の良い日には、小さな子を連れてピクニックに来る  
親子が多く見られます。無料で入れて広い場所は子連れの家  
族に優しい施設です。

しかし、私は今までこのような施設を利用しながらも茨城  
県の魅力に気付くことができませんでした。でも最近気づい  
たのは、「魅力」とは施設や店がたくさんある事や、テーマパー  
クがある事が全てではないということです。

私はこの様々な施設には地域の人の温かさがあると思っ  
ています。この茨城県の店や施設を運営する人達は優しい心  
持ち主です。よく他県の人から「茨城県は柄が良くない」と  
いうイメージを持たれていると聞きます。でもそれは全く違  
うと思います。実際、私の家族や親戚は笑顔であふれていま  
す。他にも地域の店の人や、近所の人、みんな親切で、話し  
てみると温かい気持ちになります。人と人とのコミュニケー  
ションを通してこんなにも温かな気持ちになれるのが、茨城  
県最大の魅力だと思います。

しかし、問題点もあります。それは、私達若い世代がこの  
温かみやありがたみをあまり感じていないのではないかと  
いうことです。農業に関わる人や、地域のボランティアをして

くれている人など、ほとんどが私の祖母と同じ世代の人達ば  
かりで、若い世代の人達があまり地域に貢献できていないと  
思うからです。でも、これからの茨城県を支えていくのは私  
達です。そして、茨城県の魅力を伝えていかななくてはなら  
ないのも、私達です。そこで私達中学生が今、しなくては  
いけないのは茨城県をもっとよく知り、このすばらしい茨城の  
力を自分達自身が誇りに思うことだと思います。

「魅力」は、探さなくても身の周りにたくさんあるはず  
です。このたくさんの方々の魅力に気づき、自ら行動することが  
大切なのではないでしょうか。

私も、大好きな茨城県を誇りに思い、魅力に気づき、また  
次の若い世代へと伝えていきます。

## 人と地域をつなぐアート

茨城大学教育学部附属中学校 二年 杉山 琴美

私の住んでいる水戸には、アートを通して人と人、人と地  
域をつないでくれる素敵な場所がある。それは、水戸芸術館  
だ。四季折々に老若男女が芸術館に集まり皆で楽しめる参加  
者全員が大満足するイベントがたくさんある。

春には、「高校生ウィーク」という人とアートが  
出会う四週間のテーマに高校生が企画・運営するワークショップが行  
われる。その期間中は、多くの高校生に現代美術に親しんで  
もらうため、無料で展覧会を見ることが出来る。

夏には、「こども・こらぼ・らぼ」が開催される。このイ

ベントは、二〇一一年の東日本大震災をきっかけに被災した子供たちとその家族に穏やかでほっとする時間を提供したいという思いで始められたものだ。アーティストと過ごすワークショップと、いつでもだれでも参加できるプログラムがあり、家族で夏休みのアート体験を楽しむことができる。アートの示す多面的な価値観に触れる経験が、子供たちにとって困難を乗り越えて自分らしく未来を獲得するであろう扉へとつながっているにちがいない。そのため、子供たちと共に成長してきた企画であるといえるだろう。

アーティストの日比野克彦さんにより毎年行われるようになった「明後日朝顔プロジェクト」では、春に種蒔き、秋に種の収穫を行う。朝顔の育成を通して人と人、人と地域、地域と地域のつながりを促し、アートとして楽しむためのイベントである。二〇〇三年に新潟県で始まり、今では二十八地域でつながり活動を広げている。

種蒔きでは、このプロジェクトで育てられた各地の苗をゆずり受け、水戸のプランタへ植える。つるが天までのびるようにと、つなを張る。そして、ウッドデッキに色とりどりのつるをペイントする。

種の収穫では、水戸の記憶がたつぷりと詰まった種を収穫し、その種の形や色、大きさで最も美しい種「キング・オブ・種」を選びをしてみんなで盛り上がる。その後、冬のイベント、クリスマスにむけてつるで特大のクリスマスリースを作る。毎年これを繰り返すことで、種に毎年それぞれの記憶をつなげていく。

秋には、スポーツとアートの融合「HIBINO CU

P」が行われる。午前中は、段ボールでゴールとボールを作る。Tシャツでオリジナルユニフォームも作る。趣向を凝らしたもののばかりで、豊かな感性が感じられる。午後からはそれらを使いミニサッカーをする。順位だけが評価の対象となるのではなく、最もアーティスティックでユーモアあふれる段ボールで作成したゴール、オリジナルユニフォームにも賞が贈られる。あつという間に一日が過ぎ去っていく。

このように、水戸芸術館では展示を静かに楽しむ以外の心はずむ、だれもが参加できるイベントが盛りだくさんある。アーティストさんだけのものではなく、私たちひとりひとりが参加することにより成り立っているアートが存在している。

私は、このような企画を受け入れてくれる水戸芸術館を誇りに思う。そして、私たちも楽しみながらアートを通し人や地域をいろいろな新しいかたちで、つないでいきたい。まだまだ多くの人にアートは日々の暮らしの中にある一つの楽しみであることに気づいてもらいたい。そして、幼い頃からさまざまなかたちのアートに触れてもらいたい。その経験はきっと、私たちの未来にもつながっていくはずだ。

# 私の誇り「偕楽園」

水戸市立緑岡中学校 三年 志塚 柚衣

私は水戸で生まれ、育ちました。生粋の水戸っ子です。水戸はとても住みよい、自然豊かな素晴らしい街です。そんな私の自慢の水戸の中で、一番大好きな場所である偕楽園について紹介したいと思います。

偕楽園は、私の家から徒歩十分ほどの場所にあります。そのため、幼い頃から散歩と言えば偕楽園でした。そんな身近な存在である偕楽園が、日本三名園の一つだということ、そして、ニューヨークのセントラルパークに次ぎ、世界第二位の面積を持つ都市公園だということを知った時には大変驚きました。それが、それと同時に、とても誇らしく感じたのを覚えています。

偕楽園は千波湖を借景とし、四季を通して私たちを楽しませてくれ、自然豊かな公園となっています。偕楽園内の高台にある好文亭は徳川斉昭が設計したと言われ、そこから四季折々の景色を楽しむことができます。この由緒ある好文亭の広間で、お茶会が度々開かれます。お茶会という敷居が高く感じられますが、誰でも気楽に参加することができます。私が初めて参加した時には、作法がわからず大変緊張しましたが、初心者でも全く問題ありませんでした。そして、お茶やお菓子が大変美味しく、忘れられない貴重な体験となりました。

偕楽園と言えば梅が有名ですが、園内には多くの梅林があ

ります。その中でも幼い頃から家族でよく訪れている「田鶴鳴梅林」の散歩道が一番大好きです。

また、偕楽園にはたくさん種類の梅が植えられています。そのたくさん種類の梅の中から、特に美しい六種類の梅を選んだ「水戸の六名木」があります。どの梅もとても可愛らしく、とても美しいです。散歩をしながら、色々な品種を探すのがとても楽しいです。その中でも、私は「白難波」がとても可憐で、大のお気に入りです。

梅の季節が終わりに近づく頃、梅と桜のコラボレーションが始まります。偕楽園の桜と言えば、見晴広場にある、左近の桜が有名です。この桜は、昭和三十八年に宮内庁よりいただいた桜だそうです。高さ十六メートルにも及ぶ大きな山桜は好文橋からも見ることができ、桜の季節は好文橋から左近の桜を眺めるのが楽しみの一つになっています。

桜が散った後には、ツツジの季節です。深紅のツツジがとても美しく、暖かな陽気の中家族で散歩しながら、好文亭をのぞくのがとても大好きです。

ツツジまつりが終わると間もなく、偕楽園の梅の頒布が行われます。その梅で母は梅ジュースや梅酒をたくさん作ります。偕楽園の梅で作った母の梅ジュースは絶品です。

夏の偕楽園でもう一つ大好きな場所があります。それは「孟宗竹林」です。真夏に訪れてもなぜかひんやりとしていて、街の喧騒から離れ、心が落ち着く大好きな場所です。

そして、秋には萩まつりが行われます。とても大きなたくさんのお萩が夜にはライトアップされ、その美しさにはみなさんもきつと圧倒されると思います。

萩の季節を過ぎると紅葉の季節です。私はこの季節のもみじ谷が大好きです。

そして冬になり、千波湖に冬鳥が訪れると、間もなく偕楽園では早咲きの梅が咲きだし、また私達を楽しませてくれるのです。

一年を通して四季や自然を感じることができ、いつ訪れても私達を感動させてくれる偕楽園。この素晴らしい偕楽園にぜひみなさんも、足を運んでみませんか。

## 私たちが住む茨城

水戸市立第三中学校 三年 田 光 葵 唯

毎年、都道府県魅力度ランキングワースト一位を取り続けている茨城県。たくさんの人たちが、茨城県には魅力がない、と感じていると思います。ですが、茨城県に魅力がないのではなく、多くの人々がその魅力に気づいていないのだと私は思いました。学校の授業で私たちの住む茨城県について調べた時、たくさんさんの魅力があることを知りました。

国営ひたち海浜公園では、広々とした敷地に咲き誇る四季折々の花を楽しむことができ、花の名所の一つでもあります。特にネモフィラが有名で、あたり一面に咲く景色は忘れられないほど絶景です。また、偕楽園も日本三大庭園の一つになっていて、梅が有名です。毎年、梅まつりが開催され、さまざまな種類の梅をみるることができます。きれいに咲く梅をみて、思わず「きれい」と口にしてしまうほど、自然に笑顔になれ

る場所だと思えます。

その他には、大洗のアクアワールド水族館もあります。小さい子からお年寄りまで楽しめて、家族や友達と行くにはぴったりな場所です。数え切れないほど、たくさん種類の魚などがいるため、飽きることなく、時間が過ぎていくことを忘れてしまいそうなほど、夢中になれるところが魅力です。この水族館には貴重なマンボウたちを飼育している大きな水槽があるので特徴です。めずらしい生き物をみれる場所でもあるので、海の生き物について、詳しく知ることができ、自然の一部を知れたような気がします。目の前に広がる大洗の海は、海水浴など夏に楽しめる場所になっていて、夏休みなどには、たくさんの人々が訪れます。海ぞいには、いろいろな施設があるので、海をみながらドライブしているとき、寄ったりできるのも、良いところだと思います。もう一つ、海を眺めて心をいやせる場所があります。それは、茨城県の北部にある日立駅です。この駅は外観がとてもきれいで、駅の中にあるカフェは、デザインの美しさから、グッドデザイン賞を受賞しています。電車を待つ間、すてきなカフェで海を眺めながら一息つくことができるので、日々の疲れもいやされ、がんばろうと前向きになれるすばらしい所だと思います。

さらには、袋田の滝、筑波山は、開放感があり、自然を体全体で感じるができます。袋田の滝は、季節によって全く違った景色になるため、いろいろな袋田の滝をみるることができます。神秘的な美しさを放っている滝からは、疲れた体をリフレッシュさせる力があり、落ち着くことができます。

大都市の東京から、わずかな時間で登山ができる筑波山は、日本百名山に選ばれていて、あまり標高が高くないので、初めての人にも気軽に挑戦できる山です。頂上からの眺めは絶景で東京スカイツリーも眺めることができます。筑波山から富士山の景観を眺められると、関東の富士百景にも選定され、人気を集めています。登り切った時の達成感は、他では感じることができないほどです。私たちが住んでいる場所も上から見下ろしてみてもいつもと違ったように見えるかもしれません。

大都市の東京からこんなに近く、地球の自然を感じる事ができるのは、茨城の最大の魅力だと思います。私は、この素敵な魅力があることを誇りに思います。たくさんの方がこの魅力を知り、茨城っていいところだな、と思ってもらえると嬉しいです。

## 茨城の魅力って？

那珂市立第二中学校 三年 軍 司 優 歩

茨城県は四年連続魅力度ランキング最下位が続いています。これはいったい何故なのでしょう。私は他の県に負けない、茨城県の魅力をたくさん知っています。

まず、茨城県は食べ物がおいしいです。茨城県の農業産出数は北海道について二位。また、茨城県は日本列島の真ん中あたりという恵まれた土地のおかげで作ることのできる作物の種類がとても豊富です。私の住んでいる那珂市では「那珂

かぼちゃ」が有名です。そのかぼちゃは通っている中学校の給食にも出されて、甘くてとてもおいしいです。もちろん、野菜、果物だけではありません。鶏ならば三大地鶏の一角を担う「奥久慈しゃも」。牛ならば「常陸牛」と「飯村牛」。豚ならば「美明豚」など豚も日本有数の産地となっています。また、陸上で生産される食べ物だけではありません。茨城県には海があります。那珂港では新鮮な魚介類が食べられます。名物はアンコウですが、他にも様々な魚介類も水揚げされています。

次に、観光地もあります。真っ先に挙げられるのは、アメリカのテレビ局CNNが選んだ「日本の最も美しい場所」の一つである「国営ひたち海浜公園」です。花と緑に囲まれた海浜公園は、茨城県を代表する観光スポットです。開園面積二百ヘクタールの広い園内には花畑があり、春にはスイセンやチューリップ、ネモフィラ、夏にはバラ、ジニア、ヒマワリ、秋にはコキアやコスモスなど四季折々の草花が訪れる人の目を楽しませてくれます。また、夏には「ROCK・IN・JAPAN・FESTIVAL」が毎年開かれ、たくさんの人でにぎわいます。ちなみに、春・夏・秋の時期に観覧車のてっぺんから見る景色は絶景です。

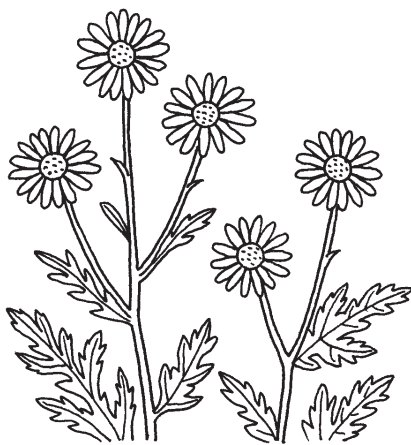
他にも、茨城県は映画撮影のロケ地として多く使われています。連続テレビ小説「ひよっこ」の舞台ともなりました。理由の一つとして、様々なシーンが撮影できるからです。県内には、茨城空港やワープステーション江戸などのたくさん施設があり、さらには山や海、湖などの大自然があります。そのため、時代劇から現代の作品まで様々なシーンに適応す



ることができるとは。

栃木県といえば、日光。千葉県といえば、ディズニールゾー  
トなどがあります。では、茨城県といえば、そう聞かれてす  
ぐに答えられない人が多いことが、魅力度ランキングが低い  
理由なのではないでしょうか。茨城県には、様々なすばらし  
い事があります。この一つがすばらしいとすぐに思いつ  
くものがないのです。でも、それこそが茨城の魅力というも  
のではないのでしょうか。要するに、一つとは決められないく  
らいたくさんのものがあるということ。伝えたら、茨城県は  
どんなところなのだろうと興味をもってくれるのではないで  
しょうか。

夏には真つ平な大地を埋め尽くすハス畑。秋には竜神大吊  
橋から望む燃えるような紅葉。冬には霞ヶ浦に白鳥が飛来。  
春にはしだれ桜。四季すべてを楽しむことができる茨城県。  
そんな茨城をさらにアピールするためには、ここに住んで  
いる私たちの力も必要です。そのためには何から始めるか。  
まず、あいさつをし合い、声をかけ合うこと。そして地域で  
協力し定期的にごみ拾いなどの美化運動をし、地域の和を  
保つていき、みんながこの茨城県大好きという気持ちで生活  
していくことが大切だと私は思います。



## 審査講評

### 第二十九回 大好き いばらき 作文コンクール

審査委員長 茨城大学教育学部教授 川嶋 秀之

茨城県知事賞をはじめ各賞を受賞された皆様、誠に改めて  
とうございます。

今年度の作文のテーマは「わたしの大好きないばらき」です。ふるさと茨城県のよいところを見つめ直し、見つけ出して、そして紹介してもらおうとの思いから、このテーマと致しました。応募総数は、一六、四六一件で、昨年より約六、〇〇〇件減りましたが、昨年度は、公益財団法人日立財団さんとの共催のご協力を得たこともあり、今年度は以前の水準に戻っております。なお、今年度から高校生の部の募集は終了しました。

寄せられた作品を見ますと、「大好きないばらき」として取り上げられているのは、山や海、湖などの自然、そこから取れる米、野菜などの農産物や果物、そしてそこに住む人々の心の温かさ、人々が伝えてきた地域のお祭りや伝統行事などででした。いずれも身近なところに魅力的で大切なふるさとを見つけ出していました。

では、以下、「茨城県知事賞」を受賞した作文について紹介します。

小学生低学年の部・小島鈴園さん「だいすきなじょうそうしのおまつり」は、常総市の「祇園祭」と「花火大会」を取り上げて、その行事に参加した経験を書いています。とりわけ、「そらにおおきなながさいているみたい」な花火が「たんぼのわたげみたいにちつていく」という様子の喩えが秀逸です。

小学校高学年の部・高畑莉美さん「私にとっておきの場所」は、暗闇の中無数に飛び交うホタルのいる幻想的な光景を見事に描き出しました。でも、そのとっておきの場所は秘密とすること。ずっと守られていくといいですね。

中学生の部・坂本琉那さん「このまちは私の誇り」では、茨城に引越してきた頃インターフォンも鳴らさず勝手に入ってくる近所の人がいて驚いたそうです。でも、それは無事であるか確認したり、野菜を持って来たりおしゃべりするためでした。坂本さんは、この町が思いやりのある温かい町であることを実感します。昔の茨城ではこんなことは当たり前にあつたなあとも私も懐かしく思い出しました。その後の展開も心を打ちました。

「日立財団小平記念賞」を受賞した作文からも一つ紹介し

ましよう。

小学校高学年の部・廣原瑛太さん「ご先祖様とつながる『ぼんづな』は、ふるさとの行事「ぼんづな」に参加し「ぼんづな」を作り引き歩いた体験を書いています。「ぼんづな」とは、お墓で「ぼんづな」にご先祖様を乗せ、「仏さま、おりらっしょ」と言って家にご先祖様を送り届けるという行事です。その中で、廣原さんは地域の人と出会い、またご先祖様があることの重みを実感しました。人々との今のつながりや、ご先祖様と時を越えたつながりの感覚がよく描かれています。

最後に、ご指導に当たられた各学校の先生方に謝意を表し、講評と致します。

## 第二十九回 大好き いばらき 作文コンクール

### 審査委員

川 嶋 秀 之  
床 波 忠 明  
照 井 康 郎  
板 橋 幸 子  
岩 田 利 美  
大 高 茂 樹  
潮 田 昌 造  
小 林 由 士 郎  
森 賢 禧  
井 坂 英 二  
寺 内 義 興  
加 藤 欣 一  
福 間 智 子  
池 田 智 子  
大 久 保 昌 義  
川 野 和 彦  
島 田 百 子